

—緊急発掘調査報告書—

南丘C遺跡

1980

伊那市教育委員会
伊那市建設部土木課

—緊急発掘調査報告書—

南丘C遺跡

1980

伊那市教育委員会
伊那市建設部土木課

序

我が郷土伊那市は全県的にみても、市単位としては遺跡数の多い事は有名である。その数は現在判明しているだけでも450カ所に近い数に達している。そのなかでも今回発掘調査を実施した南丘C遺跡を含んでいる西春近地区は78カ所の遺跡があり、地区毎ではこの数は最も多い数値である。

今回、発掘調査を実施した南丘C遺跡は凡そ、西春近の中部、沢渡地籍にあり、この遺跡の北限、あるいは西限は東春近の飛地である木裏原とその境を接している。

発掘の成果としては、限定された用地内であったので、遺構の検出はなかったが、相当量の土器、石器があり、遺跡の存在性を確実化するとともに、遺構存在の可能性を裏付けてくれた。

調査は昭和55年7月～8月かけて行われ、暑いなかでの発掘調査であったが、先述した成果を得ることができたのは誠によろこばしい次第であります。

最後、調査報告書の発行にあたって、伊那市役所土木課職員一同、調査団の諸先生、発掘作業の皆様に心より深い謝意を捧げます。

昭和55年12月10日

伊那市教育委員会
教育長 伊 沢 一 雄

例　　言

1. 本書は伊那市建設部土木課が市道伊那西部1号線に伴い、伊那市教育委員会に委託をして、緊急発掘調査を実施した結果の報告書である。
2. 発掘調査は、昭和55年7月10日から昭和55年8月12日まで、難航的に実施した。
3. 本調査は、昭和55年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆすることにした。
4. 本調査の調査組織は別に示すとおりである。
5. 本調査の遺物の注記は飯塚政美、小木曾清が行い、土器拓影は小木曾清、石器実測は小平和夫が担当し、図面の墨入は遺構は飯塚政美、土器拓影は小木曾清、石器は小平和夫が行った。
6. 本書の編集は飯塚が行い、執筆者は文末に明記した。
7. 本遺跡の資料は、伊那市教育委員会の責任下に保管されている。

調査組織

調査主体者 伊那市教育委員会
団長 友野 良一（日本考古学协会会员）
副団長 根津 清志（長野県考古学会会员） 御子柴泰正（長野県考古学会会员）
調査員 飯塚 政美（長野県考古学会会员）福沢幸一（長野県考古学会会员）田畠辰雄（長野県考古学会会员）小木曾清（宮田村考古学友の会会长）春日徳明（大正大学学生）
小平和夫（長野県考古学会会员）
作業員 池上大二、赤羽幸寿、唐木淳、大久保富美子、吉原さかゑ、酒井岩夫、工藤りよ子、
後藤重美、登内政光、小池八重子、大野田三千代、平沢八千子、白鳥あき子、酒井とし子、飯塚多加志、東野広次、御子柴泰洋、埋橋孝貴、下島和伸、北沢武雄、百沢乙平、太田利雄、酒井萬恵、保科義重
(敬称略順不同)

目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 発掘調査にいたる経過	(1)
第Ⅱ章 造跡の位置と環境	(1)
第Ⅲ章 発掘調査日誌	(3)
第Ⅳ章 発掘地区の地層状況	(5)
第Ⅴ章 造 構・造 物	(6)
第1節 造 構	(7)
第2節 造 物	(7)
第1項 土 器	(7)
第2項 石 器	(9)
第VI章 ま と め	(11)

挿 図 目 次

第1図	位置及び西春近中・南部地区遺跡分布図	(2)
第2図	地層図	(5)
第3図	地層図	(5)
第4図	地層図	(5)
第5図	地形及びグリット配置図	(6)
第6図	土器拓影	(8)
第7図	石器実測図	(9)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景
図版2	グリット及び地層
図版3	遺物出土状況
図版4	出土石器

第Ⅰ章 発掘調査にいたる経過

農林水産省及び建設省のもとに大規模農道路線が発表されるとともに予定路線内の埋蔵文化財包蔵地の分布踏査が市教育委員会によって、昭和48年2月に実施された。伊那市内でも事業の地域によって、西春近小戸沢川を境にして、北側は農林水産省管理のもとに南信土地改良事務所が、南側は建設省管理のもとに伊那市建設部土木課がそれぞれ委託を受け工事を実施してきた。このような経過からして現在、広域営農団地農道は伊那市小黒原、小沢地区を除いて辰野まで全線開通している。伊那西部1号線は諏訪形、沢渡地蔵を除いて開通している。

この道路に關係した発掘調査は昭和48年度は西箕輪大萱の大萱遺跡、西春近山本の北条・常輪寺下両遺跡、昭和49年度は西春近城の小出城（城南）遺跡、西春近宮の原の浜射場遺跡、昭和52年度は西春近白沢の児塚遺跡である。

南丘C遺跡に關係した事務的経過は次のとおりであります。

55、5、7 伊那市長より伊那市教育委員会へ遺跡発掘調査の依頼

55、5、21 文化財保護法98条の2第1項による埋蔵文化財発掘通知提出

55、5、26 伊那市建設部土木課長に発掘調査の受託の回答及び予算書の提出

55、7、9 伊那市長三沢功博と、南丘C遺跡発掘調査団長友野良一とで埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結する。

55、7、10 南丘C遺跡発掘調査の開始

55、8、12 南丘C遺跡発掘調査の終了

55、9、10 南丘C遺跡報告書刊行のための整理を実施する。

55、12、20 報告書の印刷

55、12、28 報告書の刊行

55、12、28 南丘C遺跡の費用精算及び報告書を提出する。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

南丘C遺跡は伊那谷の北部、伊那市西春近中部地区、長野県伊那市西春近沢渡南丘にある。遺跡地の南端は椎現山麓より流れ出す猪ノ沢川の左岸河成段丘面に、全般的には山麓扇状地の扇央から扇端部に位置している。この附近一帯は畑作が主な農業であり、周囲の畑には春夏秋を通じて、野菜が目に見えるよう青々としている。遺跡地附近の標高680mから690m位にある。

遺跡地附近は戦前は森林地帯であったが、終戦後、新たに農耕隊によって切り開かれ、現在は肥沃な畑作地帯となっている。開拓にまつわる逸話が数多く残されている。

西春近地区中南部地区にある大小の河川を列記してみると、北から犬田切川、猪ノ沢川、前沢川、大洞、垂沢川、堂沢川等々があげられる。これらの小河川の水を集めて、東側に天竜川が南北に流れている。

先史地理的に、あるいは考古地理学的にみて、遺跡は先に述べた小河川によって形成された河岸段丘面に多く分布しているのが実状である。この事実は当然水と関係があるものと確信する。

犬田切川に面した遺跡としては、北丘B遺跡、北丘A遺跡、北丘C遺跡、眼子田原遺跡があげられる。猪ノ沢川に面した遺跡としては南丘B遺跡、南丘A遺跡があげられる。

前沢川に面した遺跡として下小出原遺跡、東田遺跡、天伯遺跡があげられる。藤沢川に面した遺跡として山の下遺跡、井の久保遺跡があげられる。

堂沢川に面した遺跡としては上手南遺跡、宮入口遺跡、広垣外I遺跡、広垣外II遺跡、城の腰遺跡、横吹遺跡、鳥井田遺跡があげられる。天竜川右岸段丘面の遺跡としては山の神遺跡、上の塚遺跡、沢渡南原遺跡、表木原遺跡、寺村遺跡、下牧遺跡、下牧経塚遺跡があげられる。

(飯塚政美)

遺跡の名称	
①北丘B	②北丘A
③南丘B	④南丘A
⑤北丘C	⑥南丘C
⑦眼子田原	⑧山の神
⑨上の塚	⑩沢渡南原
⑪下小出平	⑫天伯
⑬下小出原	⑭天伯原
⑮東田	⑯南村
⑰井の久保	⑲表木原
⑳山の下	㉑高遠道
㉒西春近南小学校	㉓鳥井田
㉔菖蒲沢	㉕富士塚古墳
㉖富士山下	㉗広垣外I
㉘広垣外II	㉙宮入口
㉚和手	㉛上手南
㉜城の腰	㉝安岡城
㉞横吹	㉟寺村
㉞下牧経塚	㉟下牧



第1図 位置及び西春近中・南部地区遺跡分布図

第Ⅲ章 発掘調査日誌

○ 7月10日 ㈫ 晴時々曇時々雨

南丘C遺跡の発掘が順調に進ぶように、発掘器材の修繕を実施するとともに、発掘現場の状況観察をする。

○ 7月11日 ㈬ 曇時々晴

午後3時で雨のために作業終了、発掘器材の点検、発掘器材及びテントをトラックにて発掘現場まで運搬する。テントを建てる場所の草湖りや、整地を行う。

○ 7月12日 ㈭ 曇時々晴

現場へ運んだテントを建てる。テントは発掘予定地の南側に東西に細長く1張建てる。これを道具小屋用にする。その北側に南北に細長く2張越てる。これを作業員達の休憩用にする。暑くなるので、テントの横幕は張らないておく。発掘予定地の草刈り実施。

○ 7月14日 ㈯ 曇時々晴

トランシットを利用してグリットを設定する。基準坑を南東の一角に設ける。グリット名は南から北へ1～150、東から西へA～Eと決定し、1辺を2m×2m、面積を4m²以内とする。幅8mと限定された用地内なので、境界附近は2mまで満たないが一応1グリットと考えた。

○ 7月15日 ㈰ 曇時々晴

昨日、設定したグリットに基づき、A1より市松状にグリット掘りを進めていく。茅山上層式土器の検出をみたが、遺構の検出は何もなかった。

○ 7月16日 ㈪ 曇時々晴

グリット掘りを北へ、北へと進めていくと数片の土器や石器の出土をみたが、遺構の検出は何もなかった。

○ 7月17日 ㈫ 曇時々晴

グリット掘りを縱道をへだてた北側へ入れる。数片の土器の出土をみたが、遺構の検出は何もなかった。

○ 7月18日 ㈬ 晴時々曇

グリット掘りを北へ北へと進めていく、耕土が深いために土量の捨場上、前日まで進めてきた市松状の掘り方を、一つ置きの掘り方に変えていく。

○ 7月19日 ㈭ 晴時々曇

グリット掘りを東、東へと掘り進めていく。少量の土器や石器の出土はあったが、遺構は何も検出されなかった。

○ 7月21日 ㈯ 晴

作業内容は7月19日とはほぼ同じであった。



発掘風景

○ 7月22日 ㈰ 晴

グリット掘りを東、東へと掘り進めていく。少量の土器や石器の出土はあったが、遺構の検出は何もなかった。

○ 7月23日 ㈪ 晴

7月18日より実施した一つ置きの掘り方でグリット掘りを進めてきたが、本日で一応北の境界地点まできてしまった。この時点から逆に北から南へ、掘り残したグリットを一松状にもどって掘っていく。

○7月24日 (木) 曇一時雨

昨日、同様にグリット掘りを一松状に北から南へ掘ってくる。遺物の出土は少量あったが、遺構の検出はなし。

○7月25日 (金) 晴

昨日、同様にグリット掘りを一松状に北から南へ掘ってくる。遺物の出土はわずかであった。今日も遺構発見への期待はなかった。

○7月26日 (土) 晴

昨日、同様にグリット掘りを南へ南へと一松状に掘っていく。耕土層が深いので、進行状況は思った程良好ではない。土用中、遺物の出土は少なく、その指揮はあがらず。

○7月28日 (月) 晴

本日で北から南へ掘り進めていた市松状のグリット掘りは一応終了する。結局、当初遺構検出が最も期待された地区は少量の遺物が発見されただけで、遺構は何一つも発見されず、思いもよらぬ結果となってしまった。本日は、土用中だと言うのに、報道機関を通して報道されているように割合にすごしあすかかった。

○7月29日 (火) 晴

市土木課担当職員の承認をとって、さらに北側の道をへだてた地区の発掘準備にとりかかる。この地区は用地買取時より長期間荒らしておいたと見て、一面に雑草が覆っていた。従って、本日の作業第一に実施した草刈りは一層難渋であった。刈り取った雑草は今後の発掘に邪魔にならないように、隅の方にまとめて積んでおく。作業員が大勢だったので、夕方までにこの作業は完了する。

○7月30日 (水) 晴

昨日、実施した草刈りの跡へグリットを設けていく。草刈りを実施した跡は根が張っており、グリット棒を打ち込むのに根がさまた

げて、垂直に打てなかった。

○8月1日 (木) 曇時々晴

昨日、設定したグリットの掘り下げを実施する。遺物の出土は全くみられず、同時に遺構の検出は何もない。

○8月2日 (金) 晴

最も北側のグリット掘りを実施した。遺物の出土は何もみられなかった。本日で猪ノ沢川の北側は用地内の全面発掘を実施したが、遺構は何もなかった。

○8月4日 (日) 晴

猪ノ沢川をへだてた南側の草刈りを実施する。用地内は唐松林であったので、大きな木の根が連なってあった。

○8月6日 (火) 晴

昨日、草刈りを実施した地点でグリット掘りを実施する。グリットは昨日述べたように大きな木の根が不規則にあったので、一定ではなくて、不規則な形でグリットを設定した。仮に、遺物や遺構の検出がみられたならば、グリットを新たに設定してみることにした。ローム層面まで30cm位と割合に浅く、一日でほぼ指定された地域内を掘ってしまった。

○8月7日 (水) 晴

全測図の作製。

○8月8日 (木) 晴

全測図の作製。

○8月9日 (金) 晴

全測図の作製。

○8月11日 (日) 晴

全測図の作製、発掘器材のあとかたづけを実施する。

○8月12日 (月) 晴

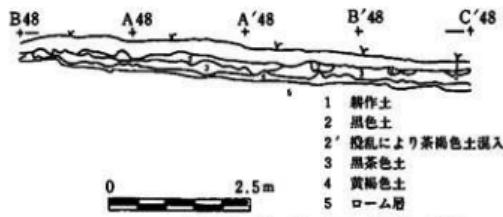
テントのとりこわし、発掘器材の運搬、本日にて、一応現場の発掘作業終了。

(飯塚政美)

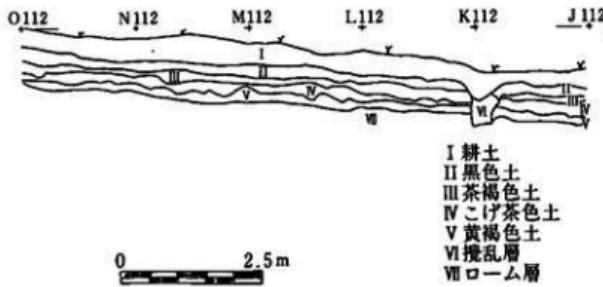
第Ⅳ章 発掘地区の地層状況



第2図 地層図 (1 : 100)

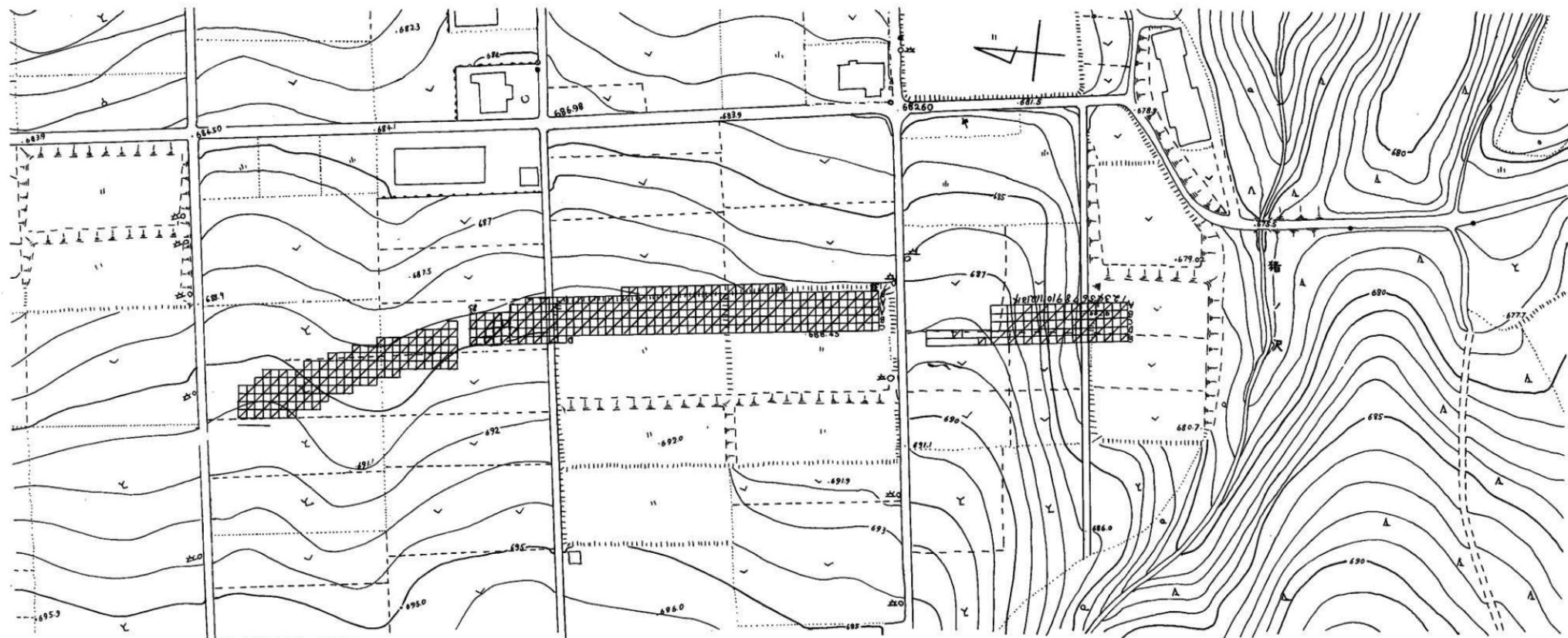


第3図 地層図 (1 : 100)



第4図 地層図 (1 : 100)

第V章 遺構・遺物



第5図 地形及びグリット配置図

第1節 遺構

今回の発掘調査を実施した用地内では遺構の検出は何もなかった。遺物の出土量からして近くには遺構の存在性は極めて高いものと思われる。おそらく用地外の東、西側には相当量の遺構があるものと推察できよう。

(飯塚政美)

第2節 遺物

第1項 土器 (第6図)

第6図土器拓影に登載してある20片の土器は全てグリット内より出土したものである。

(1～2)の土器片には胎土中に纖維が含まれている。纖維の含有量は(1)では割合に少量であるのに対し、(2)は多量に含んでおり、纖維束が器面に露出している状態が明瞭であった。色調は(1)では赤褐色、(2)では黄褐色を呈していた。焼成は中位であり、ややかたくしまっていた。(1～2)は縄文早期末葉に位置づけできよう。

(3～4)は器面に細かな撚糸文を施し、胎土中に少量の纖維を含んだ土器片であり、極めて薄手の土器で、いわゆるおせんべい土器の一派かと思われる。(3)は撚糸文の上に、さらに隆帯を横位や斜目に貼り付けてあり、口縁直下に指頭圧痕文を施してある。(4)は小さな円形刺突文が規則性をもって配列している。(3)は黒褐色、(4)は赤茶褐色を呈し、焼成は中位である。(3～4)は東海地方にその初源のある上の山式土器の一派かと思われる。(1～2)の茅山式と(3～4)の上の山式とは東西交流文化を実証してくれた良い資料である。

(5)は斜纖文がよく発達している土器片である。黒褐色を呈し、焼成は中位、胎土中に少量の長石や雲母を含んでいる。縄文前期後半に位置づけられると思われる。

(6)は土器片に二条にわたって横位の低い隆帯があり、その上にC字状の爪形文が極めて密の状態で配してあった。色調は赤褐色を呈し、胎土中に少量の長石を含み、焼成は良好である。北白川下層式の一派かと思われる。

(7～12)は器面全体に浅い沈線を配してあるもの。(7～8、12)は口縁部破片である。沈線の配列の仕方は各種あり、波状(7～8)、交叉状(9～10)、弧状(11)、単純に綫位(12)等々である。(7)は口唇から口縁下部にかけて一本の幅広の、低い隆帯を垂下させ、その上に刻目をつけてある。色調は黒褐色(7～10)、黄褐色(11)、赤褐色(12)を呈し、焼成は良好(7～10、12)、不良(11)であった。全ての破片に少量の長石や雲母を含んでいた。この仲間は沈線の施文方法からしてみて、一般的に縄文中期初頭に位置づけられているが、遺構内出土の場合はこの土器の時代決定は、他の伴出土器と共に比較検討をしてみなければならない。伴出土器によっては縄文中期中葉の前半にまで下って考えられる場合もあることを特に記しておく。

(13)は無文地に低い幅広の隆帯を横位に貼り付け、その上に指頭圧痕文を連続的に押捺してある。赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は不良である。縄文中期初頭に位置づけられる。

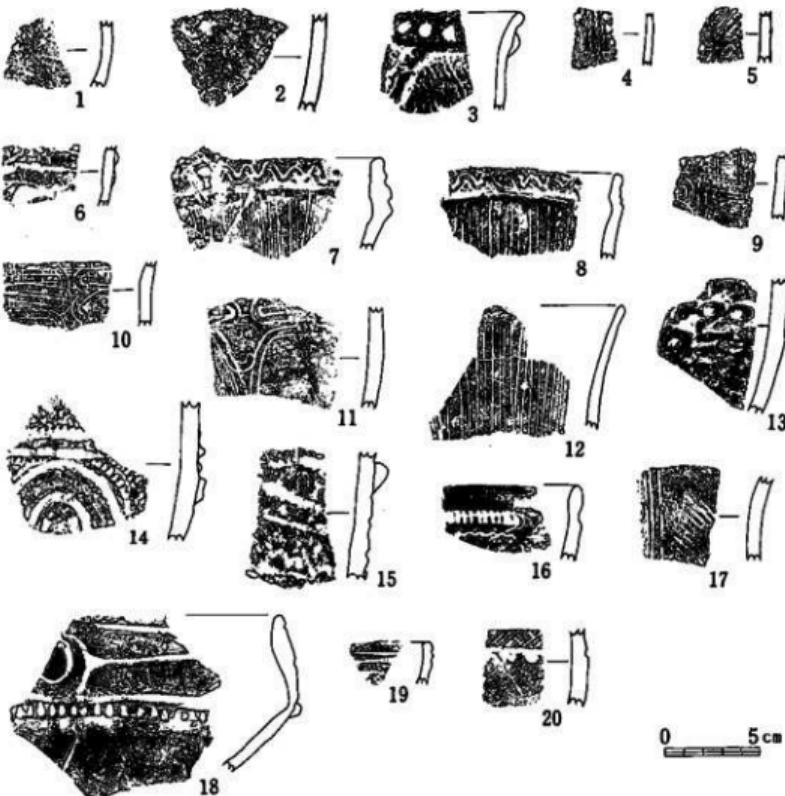
(14～16)は器面に大きな隆帯がみられ、その縁に沿って刻目や鋸い爪形文をつけてあるもの。

色調は明茶褐色(14)、赤黄褐色(15)、赤褐色(16)を呈している。胎土中に全て、少量の長石を含み、焼成は良好(16)、不良(14~15)である。縄文中期中葉に属していると思われる。

関東地方の編年で言う勝板式の一派と考えられよう。

(17)は縄文地に懸垂文のみられるもの、黒褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好である。縄文中期後葉に位置づけられよう。

(18)は浅鉢型を呈する口縁部破片である。文様構成は浅い幅広の沈線を横位に三条配し、沈線の結末は沈線状の渦巻文を呈している。これらの文様の下には隆帯を横位に貼り付け、その上に刻目をつけてある。内面には炭化物が附着していた。黒褐色を呈し、胎土中に少量の長石を含み、焼



第5図 土器拓影 (1:3)

成は良好である。縄文後期中葉の加曾利B式と思われる。

(19)は口縁部破片であり、文様は無文地に細く、深い沈線を横位に数条配してある。黒褐色を呈し、焼成は極めて良好である。加曾利B式と思われる。

(20)は破片上部は細かな斜縞文、下部は無文地が広がり、無文地は磨かれている。黒褐色を呈し、焼成は極めて良好である。縄文後期中葉頃から盛行する精製土器の類と思われる。

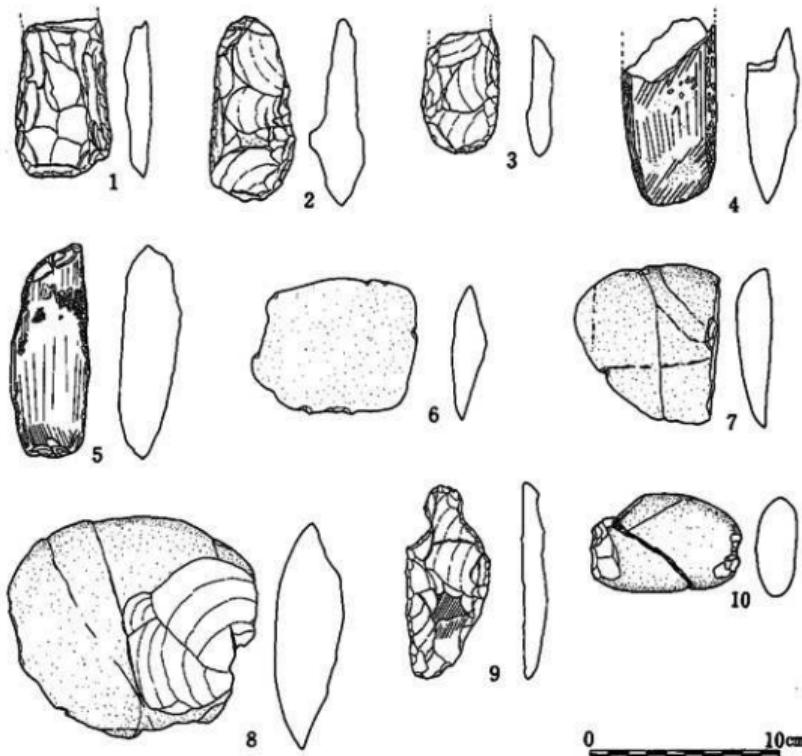
(飯塚政美)

第2項 石 器

石器は総数で10点出土した。この10点は全てグリット内出土であることを記しておこう。

打 製 石 斧 (第7図(1~3))

本例は綠泥岩(1)、硬砂岩(2~3)である。形態は刃部に向ってやや広がる楔形(1~2)、



第7図 石器実測図 (1:3)

刃部に向ってややつぼまる短冊形(3)に分けられる。両面とも製作工程上あるいは石質上からして厚さは一定でなくごつごつしていた。(1、3)の上端部は欠損している。(1~3)の打製石斧の両面とも周縁部附近は比較的丁寧に剝離調整をしてあった。

磨製石斧 (第7図〔4~5〕)

(4)は定角式で、頭部は欠損がみられる。刃部は鋭利で、刃部近くの面には研磨痕がみとめられる。(5)は乳棒状式で、断面は偏円形を呈する。上下両端部には敲打の跡が明瞭であった。

(4~5)の石質は緑泥岩であった。

剝片石器 (第7図〔6~7〕)

円錐を打ち欠いてできた剝片に刃部をつけて石器としたものである。(6~7)とともに刃部の剝離調整は確である。ともに硬砂岩を用いている。

礫器 (第7図〔8〕)

円錐の周囲を打ち欠いて剝離をつけ、そのなかへ刃部をつけたものである。石質は硬砂岩である。

石匙 (第7図〔9〕)

硬砂岩製で、長さ10.1cm、巾4.4cmを計る大型の縦型石匙である。つまみの端部に自然面を残している。刃部は周縁全部に及び、その剝離調整は丁寧である。

石鍤 (第7図〔10〕)

硬砂岩製で、小さな円錐の両端を打ち欠いて凹みをつけて石鍤としてある。凹みの打ち欠きは一撃のもとに調整したものと思われ、その凹みは深い。大部分は表裏両面ともに自然面を残している。

(飯塚政美)

第Ⅳ章 まとめ

今回の発掘調査は幅8mと限られた用地内であったために、実際に発掘調査を行ってみたが、遺構の検出は何もなかった。ただ、南丘C遺跡はかなり広範囲にわたって存在しているので、どこかに遺構集中地区があるものと思われる。たまたま、今回調査を実施した個所は遺物散布地に該当するのであろう。

遺物については相当量の土器と石器が出土した。土器について考察してみると、織維を含んだ縄文早期末葉の関東系の茅山式土器、同時期の東海系の上の山式土器が少量出土した。二つの異った地方の土器が出土している点からして縄文早期末葉にはすでに伊那谷は文化交流の接点となっていたことが窺える。その他の土器としては、諸磯系、北北川下層系、縄文中期全般、加曾利B式の土器があった。従って、本遺跡は縄文早期、縄文前期、縄文中期、縄文後期の時期にわたって人類生存の跡をうかがい知ることができる。

石器としては打製石斧3点、磨製石斧2点、剥片石器2点、礫器1点、石匙1点、石錐1点であった。

最後に、炎天下のもと7月中旬から調査を開始した。発掘当初は期待していたよりも遺構は全くなく、このような理由で意気も上らぬ日もあった事と思う。調査進行は順調で、発掘調査が無事終了できたのは、関係機関、関係者御一同の惜しまぬ支援と配意を賜わった。この紙上をもって厚く感謝する次第であります。

(飯塚政美)

図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を北側より眺む (中央の凹みは猪ノ沢川)

図版1 遺 跡 全 景

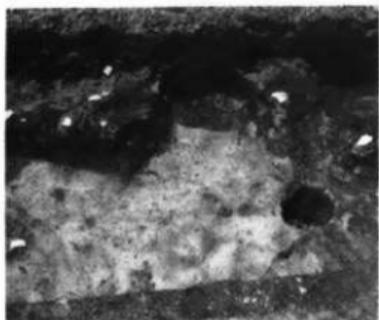


グリット状況

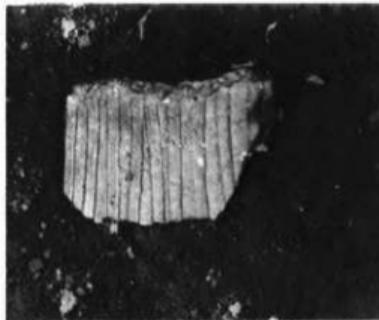


地層状況

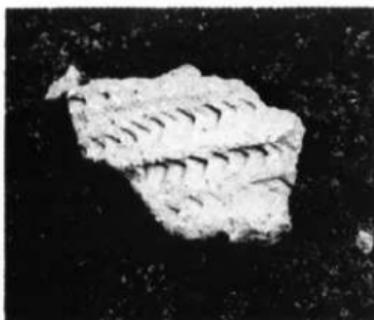
図版2 グリット及び地層状況



土器出土状况



土器出土状况



土器出土状况



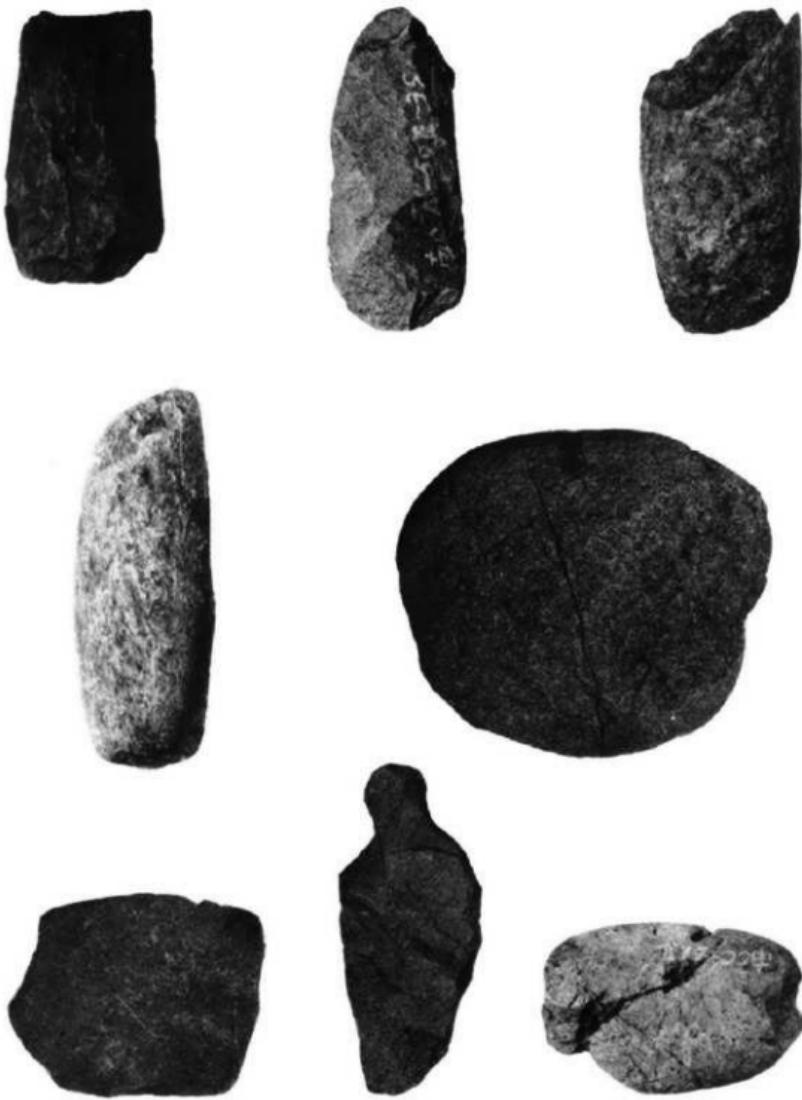
石器出土状况



石器出土状况



石器出土状况



图版4 出土石器

南丘C遺跡
—緊急発掘調査報告—

昭和55年12月20日 印刷
昭和55年12月28日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会
印刷所 長野県伊那市下春日町
㈲千代田印刷

